

「日本語回廊が目指した会話による相互的交流と、活動間の連携で見えてきた可能性」

発表者：東海大学日本語言文化学系

大学院生 阿部 康平

発表の流れ

- ①従来の日本語回廊の活動
- ②従来のやり方の“限界”
- ③転換期からの新しい試み
- ④日本語回廊を取り巻く環境の変化とそこから見えてきた可能性
- ⑤新たな課題

従来の日本語回廊の活動

- 筆者参加当初の日本語回廊の活動形態（105年度上学期～）

活動頻度：毎週1回（テスト期間除く）

活動場所：東海大学Hビル一階の広場（屋外）

参加形式：完全自由（毎週参加者が変動）

☆ 毎回の活動後に会議を行い、次回のテーマを決める



従来の日本語回廊の活動

- 筆者参加当初の日本語回廊の活動内容（105年度上学期～）
 - ①日本人スタッフが各回のテーマに基づいた「日本」を紹介
 - ②台湾との比較と、参加者の疑問から **自由な会話**へと発展

テキストに依拠しない、インタラクティブ（相互行為的）な会話練習

従来の日本語回廊の活動

- 当時の活動テーマの一例：「日本の秋のイベント」
⇒ 日本の秋のイベントや風物詩を紹介
- 紹介例：日本の修学旅行、運動会、紅葉狩りなど

従来のやり方の“限界”

- 生じてきた問題点（106年度下学期～）
 - ①年間を通した「テーマのマンネリ化」
⇒「新鮮味」を失う参加者も
 - ②情報社会の発展による「日本」との接触機会の増加
⇒活動に参加しなくても自身で興味を埋められる

従来のやり方の“限界”

③スタッフと参加者の関係性の変化

⇒紹介「する人」と「される人」の二項対立に

結果として、参加者が受け身がちに

スタッフの感想「最近みんな話をしてくれない・・・」

従来のやり方の“限界”

④学生の変化

- ・ 一部
- ・ 参加

活動が迎えた転換期

⇒ 自由にインタラクティブな会話に“限界”

幅広いニーズに対応できる活動形式の必要性

転換期からの新しい試み

- 現状打開の改善案

- ①ゲームを取り入れた交流（二項対立の緩和）
- ②次回のテーマの事前告知（参加者が準備できる）
- ③新しい会話テーマの導入（「新鮮味」の回復）

転換期からの新しい試み

- スタッフへのケア（反省会）

- ①この活動に対する個人の認識と継続の意思を再確認

- ②全員の意見を含め、この活動の方向性を再構築

- ⇒「日本語を使った授業外（形式外）の会話機会」

転換期からの新しい試み

- 改善案を取り入れた活動実践（106年度下学期～）
 - ①活動場所を日本語学科棟（室内）に変更
 - ②ゲームを用いた活動機会の増加
 - ③会話に特化したコーナーを設置（活動の細分化）

転換期からの新しい試み

- 実際の活動例

- ①ゲーム：ジェスチャーゲーム



轉換期からの新しい試み

- 実際の活動例

②会話テーマ：「日本と台湾のなぜ！？」



転換期からの新しい試み

- 新しい試みを一学期続けた結果
⇒依然として増えない参加者…

漂う八方塞がり感

転換期からの新しい試み

- 反省会（106年度下学期）にて
今一度この活動を続けるべきか討論
⇒ 満場一致で「継続すべき」
- 理由として・・・
 - ・ 日本語学習者にとって会話練習ができる貴重な場
 - ・ 日本人スタッフも活動を通じて交流の輪を広げられる など

日本語回廊を取り巻く環境の変化とそこから見えてきた可能性

- 106年度下学期末に転機

⇒「自学センター」の立ち上げ

- 自学センターとは・・・

東海大学に点在する日本語の活動を結ぶ拠点的機能を担う存在

⇒これにより、以前は点在していた活動につながりが生まれる

以前までの活動間イメージ：それぞれが独立した活動

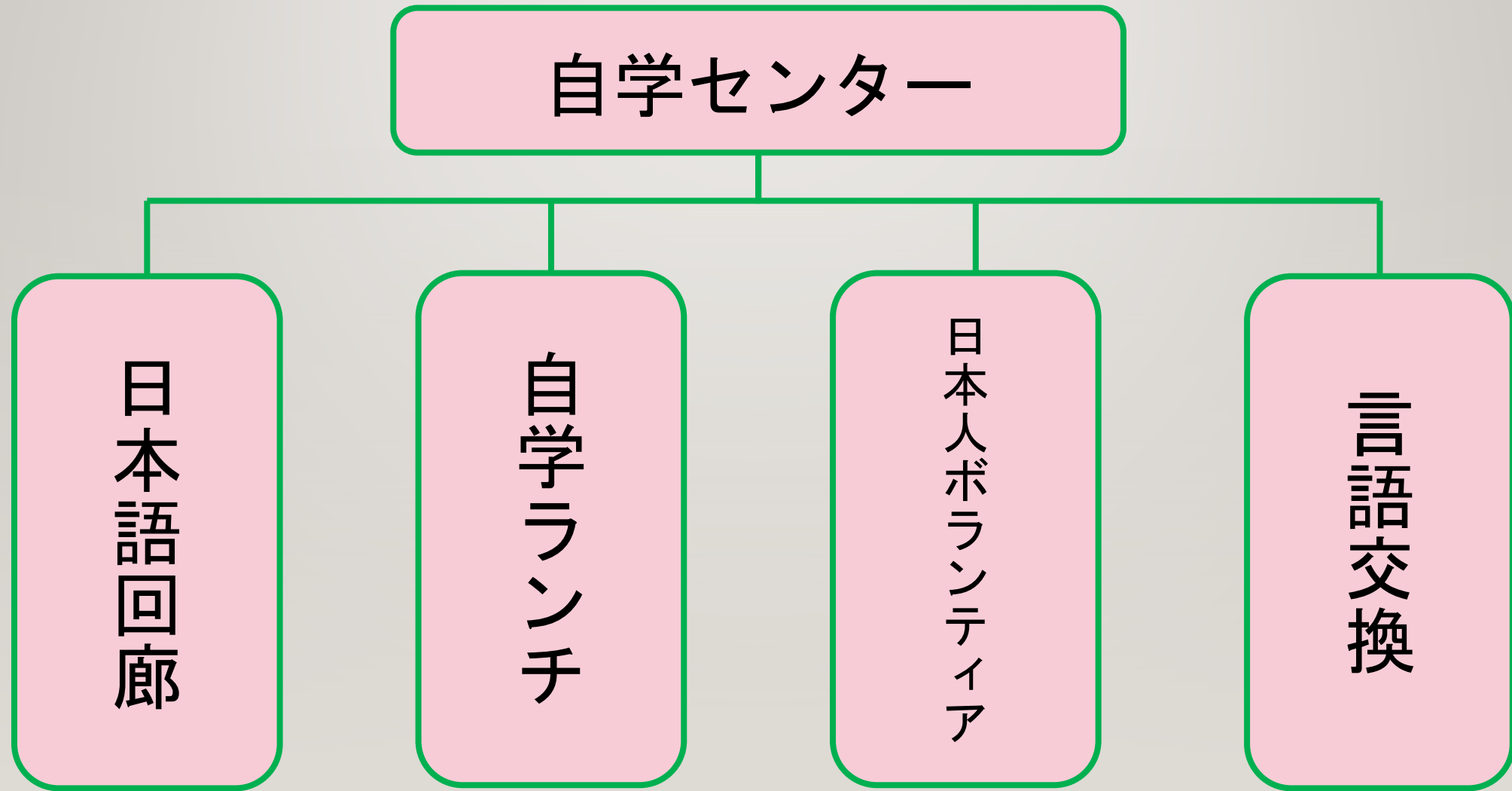
日本語回廊

自学ランチ

日本人ボランティア

言語交換

「自学センター」立ち上げ後：所属の一活動



日本語回廊を取り巻く環境の変化とそこから見えてきた可能性

- この変化が日本語回廊にもたらした影響
 - ①自分たちの強みに特化した活動展開ができる
 - ②多様なニーズにも、他の活動の紹介によって応えられる

適材適所！！！！

日本語回廊を取り巻く環境の変化とそこから見えてきた可能性

- 今学期の活動形態

活動頻度：毎週2回（月・水）

活動場所：HT102

活動形式：参加者に合わせて2つのグループを用意



新たな課題

- 継続的な運営の問題
 - ①学生スタッフの確保
 - ②活動経費の問題
 - ③スタッフの「当事者意識」の育成

ご清聴ありがとうございました。